

# 大助よ、赤れんが庁舎のようになあれ

東日本建設業保証株式会社  
建設産業図書館  
江口知秀  
Tomohide Eguchi

**久** しぶりに札幌の街を歩いてみたが、私の思い出の場所は一掃されていた。よく通った食堂や喫茶店、住んでいたアパートまで無くなっていった。二〇年前のことだから仕方がないが、なんだか別れの街のようでやるせない。

そのなかで、北海道大学植物園の近くにある大助という牛タン屋は、薦に覆われた外観も、牛タン定食も昔と変わらない美味さで、店内の飾り物まで同じ位置にあった。

しかし、残念ながら、おばあさんがいない。この店には、化粧品店の新聞広告にも起用された可愛らしいおばあさんがいて、いつも「たくさん食べてください」と麦飯のおかわりを勧めてくれた。おばあさんに会うことが、大助に通う動機の半分を占めていたのだ。気にはなつたが、二〇年前のことだもの。あえて安否は尋ねずに店を出た。

そういえば大助から赤れんがの旧北海道庁舎が近いが、その当時の私には、「やけに立派な建物だな」くらいの印象しかなく、特に思い入れはなかった。赤れんが庁舎は当たり前だが健在で、建物の北側に赤れんが庁舎とその前身の開拓使札幌本庁本庁舎跡を記念して建てられた碑があった。碑の史跡見取り図によると開拓使の本庁舎跡は、この碑のすぐ北

西に位置している。近寄ってみると芝生の上に四角い建物の跡がしめされていて、明治十二（一八七九）年の火災で焼けるまで、ここに大きなドームをのせた白ペンキぬりの米国風本庁舎が建っていたことがわかる。開拓使は本庁舎炎上後まもなく廃止となり、明治十九年に北海道庁が設けられると、後に帝国鉄道庁総裁となる平井晴二郎が設計主任を務め、赤れんが庁舎が建設された。

この建物のシンボルといえば、屋上中央にそびえるドーム状の八角塔だが、これが悲劇を生んでしまった。そもそも当初の設計では八角塔はなく、初代北海道庁長官の岩村通俊らが火災で焼け落ちた開拓使本庁舎のドームを懐かしんで、付け加えさせたのだという。

八角塔は約一三〇トもあり、建物には大きな負担となった。さらに悪いことに、設置費用を捻出するため防火扉を削ってしまったらしく、これが裏目に出て明治四十二年の火災で外壁を残して全焼した。しかも火災当時には、すでに八角塔は撤去されていたから救われない。

しかし、やはり赤れんが庁舎は八角塔があつてこそ威厳と存在感をしめす。明治四十四年に八角塔を撤去した形で赤れんが庁舎は復旧したが、当時の写

真をみると何だか物足りなく、岩村らが八角塔にこだわった気持ちもよくわかる。八角塔は昭和四十三（一九六八）年の開道百年記念事業の一環で安全な設計のもとに復元されて現在に至る。

大助のおばあさんは、たとえれば八角塔のような存在だ。今も元気にしておられると信じて、札幌を後にする。大助よ、八角塔に北辰旗たなびく赤れんが庁舎のごとく、いつまでも、そのままであれ。



開拓使札幌本庁本庁舎跡および旧北海道庁本庁舎の碑

[交通]札幌駅から徒歩約15分

※碑文の全文は日建連HPに掲載しています。